

3. 国際化とローカルティ

：「民俗舞踊と地域アイデンティティ II」

岡本 純也

I. 遠心化する身体文化：スポーツ

従来、スポーツと舞踊とは同じ身体文化でありながら全く異なるものとみなされてきた。前者は競技性を伴うものであり、後者はそれに対して、身体表現、芸術の領域に入るものと説明される。なるほど、確かに分かりやすい分類である。しかしながら、果たして単純にそのように分類できるものであろうか。本小論では、共同体の祭りから生じ、一時期競演形式で行われていた沖縄の民俗舞踊「エイサー」の展開過程と、同様に一地域の民俗競技として生まれたスポーツ（主にフットボール）の展開過程を比較することにより、民俗舞踊とスポーツの相違点を指摘し、上記のスポーツと舞踊の分類図式の問い直しを試みたい。

スポーツ科学の分野では周知のとおり、サッカーはイギリスの祝祭的民俗競技として生まれ、現在、世界各地の人々によって楽しまれている。スポーツ・ルール学の成果は、この民俗競技が特定の集団だけのものから、より広範の人々によってプレイされるスポーツになっていく過程を多くの史料から読みとり、詳細に描写している。一説には 12 世紀から行われていたといわれるサッカーの原型となる球戯は、その後、17、18 世紀には学校や空き地で行われるようになる。支配階級の子弟が通うパブリック・スクールやその卒業生が入学した大学に教育の手段として取り入れられたこの競技は、交通網が発達する以前の時代にはそれぞれの学校で独自のルールを用いてプレイが行われていた。19 世紀半ば以降これらの学校においてフットボールのルールは成文化されるようになる¹⁾。

これまでのスポーツ・ルール学は成文化されたルールを主に扱っているが、なぜ、フットボールの成文化がなされたのかについては詳細には論じていない。この成文化の過程にこそ、一地域の競

戯が、スポーツという身体文化、すなわち普遍化され、世界中の誰にでも受け入れられる文化となる理由が存在するというにもかかわらず。

ルールの成文化とは、地域間、またはそれぞれが自分の育った地域を背後に背負った個人の間の身体文化のズレの解消、調整の方策をスポーツが内部に組み入れたということを意味する。成文化されずに世代間で伝達される競戯とスポーツが大きく異なるのはこの点である。

比較的少数の集団間で競戯が行われる場合、ルールの伝達は身体から身体へと自然に行われ、ここではルールの成文化は必要ない。ただし、ルールの調整がその中で行われないということではなく、おそらくは、その発展段階で何度もルールの調整は行われたのであろうが、それは、文章によって明示化されて後代に受け渡されたのではなく、世代間で間断なく同じプレイの場を共有することによって、次から次へと身体を通して受け渡されていたと考えられる²⁾。スポーツや遊びの場面においてルールが意識化されて調整され、プレイヤーどうして確認が行われるのは、プレイの場を共にしている誰もが共有しているであろう身体的コードと、問題となるプレイの間にズレが生じた時である。調整された新たなルールが、成文化されずに後代に伝達されるためには、プレイの場を中心に、プレイヤーが過去から未来へ数珠繋ぎのようにつながっていなければならない。ある時期のルールはその時期のプレイヤーの身体に刻み込まれ、そのプレイヤーとプレイの場を共有することによって後輩へと受け渡される。このような方法によって、イギリス各地のフットボールは、それぞれ独自のルールを発展させながら、成文化されないで伝達されていたのであろう。

ところが、それまでプレイの場を共有してこなかった集団どうしが新たな場を共有しようとした

場合、プレイの全ての場面において、お互いが相手の動きの中にそれぞれのコードとのズレを感じずにはいられないという状況が生じる。このような場合、ズレを一つひとつ解消し、調整することが必要となるのである。

19世紀半ばになるとイギリスでは、交通機関や通信手段が発達し、パブリック・スクール各校どうしの交流試合が可能となった。そこでなされたのは、共通のルール of 成文化であった。1862年、ケンブリッジ大学へ通うイートン校出身者とハロー校出身者による対抗戦が行われ、そこでは10カ条の「調整ルール」が作成されたという³⁾。この「調整ルール」の制定は、ハロー校とイートン校のフット・ボールのルールのズレをあらかじめ最小限に抑えようという態度の現れであったといえよう。しかしながら、すべてのプレイにおいて、前もってズレの解消を行うことは困難だったとみえ、「調整ルール」の第一条には、ズレが生じた場合の調整の方法が明記されている。

「両チームは十一人ずつであること。キャプテンとアンパイアーは両チームごとに選ぶこと。キャプテンはそれぞれのチームを統轄 (management) すること。アンパイアーに対するアピールはキャプテンだけが行うこと。キャプテンとアンパイアーはレフェリーとして中立の人物 (neutral person) を指名すること。アンパイアーからアピールされてレフェリーが下した裁定は最終決定であること。」

以上の条文は、中村敏雄が指摘するように、試合の中でルールに違反するプレイの厳正なる判定を中立の人物にゆだねるという姿勢の現れとも読みとれようが⁴⁾、それよりも、両校のルールのズレを前提として、それを速やかに調整する人物がどうしても必要であったと考える方が妥当性をもつであろう。

こうして、異なる文化背景、プレイ経験をもつ者どうしがひとつのプレイ場面を共有する際に生ずる、たがいの意見の相違や、身体感覚的ズレの解決法を内部に組み込んだスポーツは、イギリス国内へ瞬く間に広がり、そしてスポーツのこのよ

うな性質が、全世界へとこの身体文化を普及させる大きな要因となったと考えられる。成文化によってスポーツは遠心化する方法を自己の一部としたのである。

その内部に一地域から遠心化していく方策を組み込んだスポーツに対して、その方策を持たない身体文化の代表として民族・民俗舞踊があげられよう。この点で、これらの舞踊は、求心化する身体文化と呼ぶことができる。次にそれらの舞踊の求心化について考えていく。

II. 求心化する身体文化：民族・民俗舞踊

舞踊とスポーツとを隔てる境界としてもうけられた競技性を有するかどうかという従来の視点は詳細に考えていくと妥当性をそれほど持たない。なぜならば、舞踊といえども、競技性をもつ例がいくつも存在するからである⁵⁾。その典型例として、筆者がここ数年来調査を続けている沖縄県中部に位置する平敷屋という集落のエイサーを紹介したい。

沖縄の旧盆の踊り、すなわち盆踊りであるエイサーは、平敷屋では部落を東西の2つの集団に分け、競演形式で行われる。といっても、審査員がいて明確に東西のどちらが勝者となるかを判定するわけではない。しかしながら、旧盆後に部落の人々に尋ねてみると、「今年は東(西)がよかった」という声が返される。部外者である筆者には分かりにくいのであるが、平敷屋の人にとってはそれが明確に分かるようである。したがって、東西の青年会は、お互いに競い合いながら、旧盆までの1ヶ月以上の間、毎晩練習に励むのである。

このような、競い合いのルール、勝ち負けの判定基準が、集団の構成員に共有されている場合、そのルールは成文化される必要はない。ちょうど、地域のフットボールが、成文化を必要としていなかったように。第三者からみれば、ただ、東西の踊り手が踊っているだけにみえるが、実は当事者どうしは競い合いを行っており、部落の者はどちらがその年の勝者かを固唾をのんで見守るのである。

当然のことながら、それらのルールを共有しない者は、踊り手としてはもちろん、観客としてもそのゲームの場に入り込むことは困難な状況におかれるのである。これは、余所者を実際にエイサーが踊られている場から排除するという意味ではない。旧盆には沖縄各地から数千、いや、万単位になるような人々が押し寄せて、その演技を楽しむことができるし、祖霊供養と称して部落内の家をまわる際には、部外者も気前良く踊りの輪に加えていただける。だが、平敷屋の人々が楽しんでいるような、踊る身体とそれを観る人々が織りなす競技としてのエイサーの場には第三者は加われないのである。部外者が平敷屋のエイサーを見るという行為は、たとえて言うならば、ゴールにボールを入れることがサッカーの勝敗を決定するというのを全く理解しないまま、そのゲームを観るという行為に等しいのである。そのゲームに加わるチケットを手にする手段は、当事者として、旧盆までの期間を踊り明かすか、毎年、平敷屋へ足を運んで踊りを見続けるしかないであろう。それは、平敷屋の人々にとっては、そこで生活を営み、青年になったら踊りに加わるという至極当たり前の暮らしによって容易に手に入るものであるが、その土地に暮らさない者にとってはほとんど入手困難なものといえよう。時間の経過によって少しずつ身体に蓄積される経験。こうして蓄積された身体文化が、身体によって、平敷屋の人々を結びつけ、他者との間に明確な境界を引くのもこのような理由による。

そこには、スポーツがもつような、他者とのズレを解消させる方策は存在しないのである。時間と経験だけが、その調停役となる。この点で平敷屋のエイサーは遠心化しない、求心化する身体文化であるといえる。

Ⅲ. 求心化する身体文化の競演

沖縄各地で旧盆に踊られるエイサーには、平敷屋のような、それぞれの地域独自の優劣の判断基準が存在すると考えられる。部外者には分りにくい、その土地のエイサーの美学といったようなものである。先述の通り、この優劣の判断基準は、

その土地のエイサー経験を通して内面化されるため、基本的に自らの土地のエイサーにしか適用できない。しかし、旧盆には各地でエイサーが踊られ、この時期には、自分たちとは別の地域のエイサーを目にすることがある。そのような場合、別の土地のエイサーは、彼らにとってどのように観られるのか。おそらくは、自分たちのエイサーが勝るとみなすであろう。なぜならば、別の土地のエイサーを観る際にも、自分たちのエイサーを観る判断基準が適用されるからである。沖縄の青年は、どこのエイサーが良いと思うか、と質問すると、「わたーが一番（俺たちが一番）」という答えを多くの者が返す。この言葉が、上記の事実を何よりも物語っていると思われる。

そのようなエイサーを一同に介して競演をさせるという趣旨の祭りが戦後の沖縄において行われていた時期があった。それも、審査員による採点の合計によってその優劣が決められ、入賞した地域の青年会には賞金と賞品が受け渡されるというものである。「エイサー・コンクール」と名付けられたこの競演会は、当初、大盛況をおさめ、会場となった小学校の校庭には数万の観客が押し寄せた。

1956年に始まったコザ市（現沖縄市）の「エイサーコンクール」では、その審査の明確さを確保するために一定の審査基準が設けられ、審査の項目が新聞の紙面に掲載された。「第3回全島エイサー・コンクール」の審査基準は以下のようなものである。

- 「一、服装（品位、美的、簡素）
- 二、体形（77）（整然、変化、美的構成）
- 三、態度、技能（団体行動、精錬度、明朗、品位、威勢）
- 四、伴奏（技能、音声、品位、明朗、節度）
- 五、変化（従来＝古的、現代的）

なお、一チーム三十名以上、チームの所要時間は四十分。（琉球新報 1958年8月31日）

民俗舞踊でありながら、工夫を奨励しているという点でこの審査基準は非常に興味深い。新聞に明文化されたこれらの項目はスポーツのルール

の成文化と同様なものと考えられるであろうか。

異なる地域の集団の身体文化どうしが、一定の競い合いの場を共有することを目的に設けられたという点ではエイサー・コンクールの審査基準とフットボールのルールの成文化は共通しているとみなせる。だが、しかし、上記のエイサー・コンクールの審査基準は、各地のエイサーのルールのズレを解消、調停する機能は持ち得ていなかった。各地のエイサーの優劣の判断基準はその土地の者の身体の中に、「まなざし」の中に時間をかけて刻み込まれたものであり、それは成文化によって調整されるようなものではなかった。

その結果、各地のエイサーは、地域ごとのズレをズレのままエイサー・コンクールの場に持ち込んだのである。地域の青年は自分たちの優劣の判断基準で自らの身体技法の技を磨き、工夫を凝らしてコンクールの場に臨んだと考えられる。したがって、入賞を逃した地域の青年には常に不満が残るのである。自分たちとしては最善を尽くしたにも関わらず、なぜ入賞できないのかと。

コンクールの審査員となった、市長や議員、大学の教授など、いわゆる文化人は、審査の結果に不満をもつ青年に石やカンを投げられたり、家にまで押しかけられたりしたという。当時の新聞記事にもそのような様子が読みとることができる。

「審査に不満 青年会騒ぐ」

警官 30 人が出動

コザ市の全島エイサー大会は、二十七日午後二時からコザ市中之町の市営球場で開かれ、中部各地の十一青年会が参加、二万余の参加者を集めて例年以上の盛り上がりを見せたが、大会終了前、同日午後九時ごろ与那城村 A 青年会（a 青年会長）九十人と具志川村 B 青年会（b 青年会長）八十人の二青年会が「審査は納得できない。審査員を出せ」と怒り声をはりあげて審査側に抗議、これに対し審査側は「もう閉会した。解散せよ」といって騒ぎ、このためコザ署ではパトカーなど三十余人の署員が現場にかけつけるなどいちじ騒然となり、騒ぎはやっと警察官の退場命令でおさまったが、せっかくのエイサー大会に大きなしゅう

たいをみせた。

関係者の話だと騒ぎの原因はエイサーがまだ終わらぬうちに審査結果が外部にもれていたことだという。閉会前に一位になった C 青年会が歓声をあげて踊り出したため、一、二位に自信を持っていた A、B 両青年会では二、三位に落とされたのがどういうわけか、審査結果をあきらかにすべきだと抗議したという。（沖縄タイムス、1967 年 8 月 28 日）」

このような青年会の不満は至極当然のものであったといえよう。彼らからしてみれば、自らの判断基準で見た場合、どうして、他の地域のエイサーが自分たちよりも優れているとされるのか理解できなかったのである。彼らの踊りを正当に判定できるのは、コンクールの審査員ではなく、彼らと同じ評価基準を身体に刻み込んだ、同じ部落の人々だけなのである。

地域の身体文化のズレをそのままにして、優劣を判定しようとしたエイサー・コンクールは、いわば、各国一番とみとめられる詩人が、自国の言葉で詩を朗読するのを、それらの国の言葉を全く理解しない第三者が無理矢理順位付けしようという試みであったともいえよう。そこで評価されるのは、それぞれの国の国民がもつ言葉に対する美的評価基準である。不当な評価を受けたという詩人の怒りはその国の国民の怒りともなろう。地域の評価基準への順位付け、これがエイサー・コンクールの場ではなされていたのである。1950 年代から 1960 年代にかけて沖縄各地で盛んに催されていたエイサー・コンクールは、1970 年代に入ると一斉に競演形式を放棄し、競い合いのない「祭り形式」へと姿を変えていく。その背景には、以上に述べてきたような、民俗舞踊という普遍化しにくい身体文化に優劣をつけようとしたエイサー・コンクールという企画の矛盾があったのではないかと考えられるのである。

IV. 求心化しながら遠心化する民俗舞踊

現在、エイサーは地域共同体の者だけが楽しむ身体文化からより広い範囲の者が楽しむものへと

変化している。それは、これまで述べてきた、この身体文化の特質と大きく関与している。すなわち、求心化するという特質である。先に、地域共同体以外の者が楽しむということは遠心化であると述べたが、スポーツの遠心化と民俗舞踊の遠心化では大きくその質が異なるようである。民俗舞踊の遠心化とは、いわば、求心化しながらの遠心化とでも呼べるような現象である。それは「民俗舞踊を踊る」という行為の広まりと、「民俗舞踊をみる」という行為の広まりという2つの異なる、しかし、それらは互いに相絡まった行為の広まりによって特徴づけられる。

まず、「エイサーをみる」という行為の広まりについて考えてみよう。

沖縄の夏には、各地で観光客誘致のイベントが催され、エイサーはそれらの中で目玉とされている。数十人から、多い場合には百人を超えた青年男女による演技は、観光立県をうたった沖縄県にとって、恰好の観光資源となっている。中でも、エイサー・コンクールにとって代わった各地の「エイサー祭り」には、毎年、数万から時には十万を超す多くの観客がエイサーを見るために訪れる。地域の青年会は、旧盆には自分が育った部落で踊り、旧盆の前後の時期の土曜、日曜には大きな会場で催されるイベントの場で踊る。最近では、県外のイベントに出演する青年会も多くみられる。また、メディアはそのようなイベントでエイサーが踊られる様子を喜んで取り上げている。

観光客がわざわざ足を運んで「みる」ということとメディアが恰好の取材対象にするということは何を意味するのか。ここで期待されている「みる」という行為は、エイサーが踊られる地域の者が、今年のエイサーの出来映えについて関心を持ちながら「みる」という行為とは大きく異なるといえる。すなわち、多くの観光客やメディアからエイサーが踊られる様子をみる視聴者は、あるエイサーの細かい出来映えを理解しようとしてみていないし、また、求心的な身体文化であるエイサーは、時間をかけて見る目を養わなければ理解できないものである。むしろ、ここで期待されてい

るのは理解できない身体がそこにあるということであろう。

観光客は金を払って非日常の体験を味わうために目的地を訪れる人々のことである⁹⁾。したがって、自分と同じ身体感覚をもつ者は日常の構成要素であるからそこから遠ざかり、より、自らと離れているものに興味をひかれる。ようするに、エイサーの会場を訪れる観客は、エイサーを踊る青年の身体に、自分の身体感覚では理解できない距離、すなわちズレの感覚を期待しているのである。メディアも日常みられるものは期待していない。その対象が、普段みられないものであるからこそ取り上げる価値があるのだ。観光・メディアという、世界に開かれた「みる」という行為の場では、エイサーの、いや、それ以外の身体文化にも当てはまる、求心的特徴（土地の者にしか理解できない）こそが価値をもつのである。この点で、分かりやすさをこそ観客・メディアに期待されるスポーツとは大きく異なる。

次にこの民俗舞踊を「踊る」という行為の広まりについてみてみよう。

現在、沖縄には「琉球国祭り太鼓」というエイサーをアレンジしながら、自分たちで振り付けを考えて踊るグループが存在する。彼らは、1年中活動を行っているという点、地域を超えた青年が集まっているという点でエイサーを踊る青年会とは異なる。「祭り太鼓」は沖縄県の各地に15の支部、東京や大阪などの県外に5支部、ロサンジェルスやハワイ、ブラジルなどにも支部をもっている。彼らは、旧盆には踊らず、観光イベントを中心に活動を行っている。その演舞は時に数百人を動員して踊られるので、その迫力は青年会のエイサーにはないものである。

「琉球国祭り太鼓」の踊り手の広がり、地域の境界を超え、世界へと開かれている。しかし、この展開はスポーツの遠心化とはやはり異なるであろう。依然として、踊る者とみる者の境界は取り払われないからである。また、世界への広がりも、移民を中心になされ、「沖縄」という地域を超えているとはいえないのである。「琉球国祭り

太鼓」の踊りは、やはり、「沖縄」へ求心化する身体文化といえよう。

V. スポーツの国際化と民俗舞踊の国際化

以上、本論でみてきたように、スポーツと舞踊は同じ身体文化でありながら、その内部に遠心化の方策をもつか否かによってまるで質を異にする。したがって、その、世界への普及＝国際化の仕方も異なるのである。スポーツの国際化とは、先述したように各地域に存在する身体感覚のズレを調停しながら達成される。それに対して、民俗舞踊の国際化は地域間の身体感覚のズレを残したまま、そのズレに価値をみいだされるということで達成される。そして、このズレの感覚こそが、その舞踊をもつ文化の独自性を保証し、アイデンティティの確証の源泉となるのである。

デンマークの身体文化論者アイヒベルクは、身体文化がアイデンティティに影響を与える要因について以下の3点を上げている⁷⁾。

- ・結果や記録の生産
- ・社会的な規律訓練
- ・社会的な身体言語

スポーツによるアイデンティティ確認は彼の提示する第一の項目に関係する。「集団としての『我々』は、正確な測定が可能であり、ヒエラルキー・システムの中に位置づけられるひとつの結果と関わっている」と彼は言う⁸⁾。世界的な共通のルールをもつスポーツの世界は、全体としてヒエラルキーを形成する。スポーツの勝敗の結果は、その中のどこかに位置づけられるのである。ワールド・カップやオリンピックの結果は、そのスポーツの中でそれぞれの国の力が試される場となっているのである。

一方、民俗舞踊によるアイデンティティの確認は第2、第3の項目と関連する。社会的規律・訓練の中の「我々」は「『我々』の共通のリズムの正確さによって、『我々』の直線的な列の精密さによって、『我々の』健全な身体の放熱によって、『我々自身』を表示」するのだ⁹⁾。この点は、民俗舞踊の中でも集団舞踊に当てはまるであろう。

そして、第3点について、アイヒベルクは、集団内部の深いコミュニケーション作用をこれらの身体文化がもつことを、アイデンティティへ関与する点としてあげている。そのような身体文化の中では「『我々独自の』自然の体験とか、『我々独自の』ランドスケープは、身体のムーブメントの一部であり、ときには直接ゲームに統合される¹⁰⁾」のである。まさに、この身体文化は、その内部の者に世界を「独自」の見方でみせるものであるといえよう。同じ身体の動きをみながら、明らかに内部の者と外部の者を隔てる作用。それをこれらの身体文化はもたせるのである。この点こそが、交通手段や情報化によって、世界の境界が無くなる方向へと向かう国際化社会の中で、この身体文化に属する民俗舞踊が一地域のアイデンティティと深く関わる要素であろう。

スポーツ人類学者寒川恒男は、近代スポーツと民族スポーツを分類する視点として以下の見解を示している。

「スポーツがこれを行う民族の固有な文化に閉じこめられている状況は、当該スポーツを民族スポーツと認定し、これを近代スポーツから区別する一つの基準となる¹¹⁾。」

「……近代スポーツは、特定の民族文化に拘泥することから解放されたところに成り立った。この意味では、近代スポーツは『国際化したスポーツ』なのである。国際化とは、特定の民族のもとに生まれた事物が、文化をちがえた多くの民族社会に受け入れられることをいうからである¹²⁾。」

ここで寒川が論じる民族スポーツは、民族・民俗舞踊と近代スポーツとのちょうど中間に位置する身体文化であるといえる。民族スポーツには、その外部にいる者には分からない部分が多く存在する。ここで述べてきた身体感覚のズレである。この、部外者との感覚のズレを解消できたとき、民族スポーツは近代スポーツになりうる、と寒川は論じる¹³⁾。そして、その例として騎馬に乗った者が羊を奪い合うという中央アジアの遊牧民の民族スポーツブスカシのルールの改変をあげてい

る¹⁴⁾。首と手足を切り取られた羊を奪い合うという、一見したところ部外者には残酷に映るこの民族スポーツは、羊をネットをかぶせたボールに変化させたことで他の地域の者にも受け入れ可能とされ、国際化の方向へ開かれることになったという。

我が国でも民族スポーツに匹敵する身体文化はいくつも存在する。剣道などはそれであろう。剣道が柔道に比べ、国際化しにくいのは、その勝敗の判定基準が部外者には分かりにくいためである。日本人にも剣道の一本は分かりにくい。気、剣、体の一致という言葉で示されるその判定基準は、剣道を長年経験することでしか見極めることはできないのである。この点で、剣道は民族・民俗舞踊に類似するといえよう。同じ武道でありながら、柔道は、判定基準を世界の人々に分かりやすいように改変することで国際化をなしえた。しかし、依然として日本人にしか分からない美学はその中に残されている。カラー柔道着を受け入れるか否かの日本柔道連盟と世界柔道連盟の激しいやりとりはその現れである。近代スポーツとなった柔道は身体感覚のズレを調停する機能をもつために、この問題は、より多くの国が指示するカラー柔道着の採用ということで決着をみたが、我が国の柔道家には未だ違和感をもつものがあることは事実である。判定基準は不明瞭であるが、勝敗という普遍的な結果が読みとれる民族スポーツは、優劣の判断基準が不明瞭であり、かつ、勝敗という結果が読みとりにくい民族・民俗舞踊に比べ、まだ、国際化の方向へ開かれているといえよう。部外者には分かりにくいことだらけのこれらの舞踊は国際化社会の中で、圧倒的に地域の文化を代表する存在となっているのである。

【 註 】

- 1) 中村敏雄、『スポーツルールの社会学』，朝日新聞社，1991年52～55頁。
- 2) 中村敏雄、『メンバーチェンジの思想』，平凡社1989年，98～99頁。
- 3) 中村前掲，1991年，書51～52頁。
- 4) 同上書，57頁。
- 5) 競技形式の社交ダンスなどはその典型例であろう。
- 6) 山下晋司編，『観光人類学』，新曜社1996年，7頁。
- 7) ヘニング・アイヒベルク，清水諭訳，『身体イメージーション—デンマークにおける「身体の知」—』，新曜社，1997年，52～53頁。
- 8) 同上。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 寒川恒男，「スポーツの民族性と普遍性」サントリー不易流行研究所編，『スポーツという文化』，TBSブリタニカ，235～237頁。
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 同上。